

マレーシア短期留学プログラムへの一考察

野 口 由 雄*

[Abstract] This paper reports and evaluates the short-term study abroad program in Malaysia which was held from August 8 to 30 in 2010. There are several different short-term study programs in several countries offered by BGU, each having a unique situation and attributes. This is the first program held in Malaysia, an Asian country where people use English as a second (common) language. In the first part of the paper I explain the English Education system in Malaysia and the environment of Universiti Teknologi Mara, UiTM. Then I report the program schedule, the course syllabuses, and my in-class observations. For the future of the program I consider not only the quality of the existing program but also ways to actually improve it. To evaluate the program more objectively I use three kinds of questionnaires: one for Bunkyo Gakuin students, one for their instructors in Malaysia and one for Malaysian students who helped in the Communicative English classes. This summer 11 students (6 college students and 5 university students) took part in this program.

I はじめに

この夏、本学では、約 200 名の学生が本学主催と他の催行による海外留学・研修プログラムに参加した。「日本を飛び出ぬ若者」というタイトルで、日本人学生のうち向きになってしまった姿勢に警鐘を鳴らした記事が新聞に掲載された¹⁾。上記 200 名という数字が、本学の学生にその傾向がないと証明できることを期待する。ここでは、一つの夏季短期留学のプログラムを取り上げ、国際理解教育と同プログラムの今後の充実、発展のため、同研修地の実情、英語を中心とした研修内容とその教育的効果について報告、考察する。

本年度は、短期留学（7 コース）・派遣留学（3 コース）・交換留学（4 コース）・フィールドワーク（4 コース）の合計 18 プログラムに及ぶ多彩な留学プログラムが用意されている。その中で、今夏はじめてマレーシアにおける短期留学プログラムが実施された。正式名称は UiTM (UNIVERSITI TEKNOLOGI MARA)-BUNKYO GAKUIN UNIVERSITY SUMMER PROGRAMME 2010（学内では「マレーシア短期留学プログラム」の呼称を基本としている）

*教授／国際理解教育

である。

同プログラムの内容は、3週間で行われる30時間の英語研修を中核としている。それに加えて、午後を中心とした文化体験（バティック染め、ガムラン音楽、料理他）や世界遺産（マラッカ）を訪ねる異文化理解のための小旅行等のアクティビティがある。この留学費用は約23万円となっている。また、海外語学（英語）研修2単位の取得や奨励金5万円の取得が可能である。

この魅力的と思われる同研修に対して、5名から12名の募集をした。そして、海外での学びを実践しようとする学生11名の応募があった。同プログラムに参加した11名は、外国語学部生5名と短期大学生6名の女子学生であった。この学生集団の引率者として、研修地の教育・生活環境、研修内容、その状況・成果について報告、考察をする。

同プログラムの中核は語学（英語）研修である。そこで、「どうして、マレーシアで英語を学ぶのか」という疑問も少なからず生じてくると考える。その疑問にも言及するために、マレーシアにおける英語教育の一端を紹介する。ここに関係する国情、同国の文化、同国における言語環境等に触れる。そして、研修先であり、本学の提携大学であるマラ工科大学（UiTM）、同大学の国際教育センター（International Education Centre）による指導に言及する。

対象となる学生は、希望者が全員参加したため、学年、英語力等に差があった。同学生に共通したTOEICの得点で見ると、約200点から450点に分布していた。また、対象となった学生が11名と少数なために客観的な分析結果には多少の偏りがあると予測される。よって、アンケートには自由記述で回答できるものを増やし、さらに聞き取り調査も加えた。

この英語研修内容に関して、指導プログラムスケジュール、シラバス、教材、そして各授業観察結果、対象学生アンケート、指導者アンケート、そして学習支援者アンケートの順でまとめた。指導プログラムスケジュール、シラバスに関しては学習単位資料（Module Information）にまとめられていたため、それを優先して使用した。また、アンケートの対象者が日本語話者でない場合は英語による調査票を使用した。同調査に関しては、その作成、回収等を国際教育センターのファティン講師に協力していただいた。その調査結果に関しては、原文を掲載し、その概略を日本語で言及した。また、固有名詞等はマレーシアで使用されているものをそのまま使用しているので、英語表記との違いがある。

II マレーシアにおける英語

1 国情と英語に関する背景

マレーシアの国情を地理的に考えていくと、赤道に近い（北緯1度～7度）位置にある常夏の地域にあり、西マレーシア11州とボルネオ島北部のサバ、サラワクの2州からなる国である。また、歴史的にはポルトガル、オランダ、イギリス、日本に支配され、1957年にイギリスから独立しマラヤ連邦となったが、1965年にシンガポールが分離独立し、現在のマレーシ

アとなった。そして、特徴としては、マレー系、中国系、インド系を中心とした多民族国家で、連邦の宗教としてイスラム教を定めた国ということがある。祖慶壽子は『アジアの視点で英語を考える』の中で歴史に関して次のように述べている。

「18世紀後半にイギリスが植民地化する前のマレー半島は政治的にまとまった国家はマラッカ王朝を除いてほとんど存在しなかった。イギリスは中国とインドから多くの労働者を移住させた。中国人は主にスズ鉱山で、インド人はゴム園で働いた。民族内の同化はほとんど進まず、まして異なる民族間では同化は全く進まなかった。2010年現在のマレーシアの民族構成に関する内訳はマレー系 66.0%、中国系 26.0%、インド系 8.0%、(マレー系には中国系及びインド系を除く他民族を含む)」²⁾ 下線³⁾

この民族の多様性は、各民族の人々がコミュニケーションをとる場合を考えると、共通する言葉としての英語は重要である。また、マレー系に含まれる他民族については、最近数回の訪問で、アラブ系やアフリカ系と思われる人たちが、クアラ・ Lumpur をはじめ、シャー・アラムやスバンジャヤなどの近郊地域で、旅行者、滞在者を含めて増加傾向にあることを知見した。

また、英語に関して本名信行は『世界の英語を歩く』の中で、

「マレーシアは1957年にイギリスから独立したとき、マレー語を国語に制定しました。ただし、当時の憲法は、その後10年間は、英語を公用語として残すことにしました。そして、1967年の国語法でマレー語をマレーシア語と命名し、これが唯一の公用語となりました。学校教育は徐々に英語からマレー語（Bahasa Melayu）に移行し、1983年には初等中等教育はすべてマレーシア語（Bahasa Malaysia）でなされるようになりました。しかし、その後も英語の重要性は認識されており、英語は第二言語として小学校から必修科目とされています。国民の20%は英語ができ、都市人口の25%は日常の仕事関係で英語を使っていると見られています。」⁴⁾

と説明している。ここ数年間において、学校、大学などの環境で、マレーシアの若者とコミュニケーションをとる機会が多い私には、英語の使用者は年を追うごとに順次その割合が増加していると知見している。

2 研修地における環境

研修場所は、提携関係がある UiTM (Universiti Teknologi Mara) 大学の広大なキャンパスの諸施設である。同大学は、学生数14万人（教授からの話では17万人）、キャンパス13を有し、研究のあらゆる分野で多数派のマレー系が優遇される政策（プミプトラ）を充実・発展させていくことを使命としている⁵⁾。そして、学長はマレーシア国王である。そのメインキャンパスはスランゴール州の州都シャー・アラム（かつてクアラ・Lumpur が州都であった）にあり、同大学施設に宿泊をし、研修した。

同キャンパスは広大な敷地、施設をもち、教育内容も充実している。また、イスラム系の学

生が中心で、学費が安いことが特徴としてある。学生の学ぶ意欲は強く、その姿勢は真摯であるという印象をもった。夜の10時まで講義があり、多くの学生が学んでいた。

同大学の評価については、マレー系、中国系の人たちによって評価に違いはあるが、学生の学力、大学の研究・教育力等を基準とした社会的なものでは、15ある国立大学の中でほぼ中堅の位置にあると、第三者の立場にいる人たちから聞いた。また、同大学の学生に聞くと、上級中等学校（日本では高校にあたる）では国立大学志向が強く、私立大学は約50校ほどあるが、国立大学に入学できない生徒が私立大学を中心に進学し、それらは小規模な大学が多いという。

本学生は、研修中一泊2日のホームステイプログラムの日を除いて、同大学の学生寮に宿泊し、同大学施設で授業を受けた。同学生寮は、アラブ系を中心とした留学生が多く、家族寮も完備されており、その家族の小さな子どもたちが寮内で遊んでいた。あるリビア人家族は、その父親が2年半で大学卒の資格を取りに来たと聞いた。ほとんどがイスラム教徒ではあるが、ドイツからのグループは単位互換ができるのと、授業料が安いという点に魅力を感じて留学していた。

本学生11名は Kristal University College という留学生専用の12階建ての学生寮用（Hostel と呼ばれる）に20日間滞在（ホームステイの一泊を除く）、生活した。その学生寮における部屋割を「学生寮における部屋割一覧」（表-1）にまとめた。このような状況から外国人留学生と部屋を共有した本学生は、授業外で英語でのコミュニケーションを日々体験していた。個人的な差はあるが、このような英語を通しての体験が、同プログラムの満足度に多少の影響を与えていた。

表-1 「学生寮における部屋割一覧」

Room A	Room B	Room C	Room D	Room E	Room F
BGU S	BGU S	BGU S	BGU S	BGU S	BGU S
BGU S	BGU S	イラン人学生	アラブ首長国人学生	イラン人学生	BGU S
イラン人学生	イラン人学生	イラン人学生		モーリタニア人学生	BGU S
					BGU S

* BGU S 文京学院大学 学生

* 各部屋は3人各自がベッドルームを持ち、シャワー、キッチン等を共有する。シャワーは水、エアコンの設備はない。

3 マレーシアの英語教育

マレーシアがイギリスの支配下に100年以上もあったことにより、その宗主国イギリスの影響を受けている点は、随所に見られた。学生の宿泊先であった寮（建物）を College と呼ぶの

は、イギリスの大学内の寄宿舎をまねたものであろうし、印刷物では一般的に使われる英単語 program をつかわず、イギリス英語で使用されるスペル、programme を必ず使用していた。本名は、『アジアの最新英語事情』の中で次のように述べている。

「100年以上続いたイギリスの支配下で、宗主国の言語である英語は早くから公用語、共通語として機能していたため、かなり広く浸透し、今なおその影響力は大きい。」中略「1970年には、10年間の英語を公用語として据え置くという公約期間が終わったことを受けて、政府は国語であるマレー語（Bahasa Melayu）をマレーシア語（Bahasa Malaysia）と呼び方を変えた。」⁶⁾

そして、1970年に政府は教育言語をマレーシア語に統一し、段階的に教育のマレーシア語化を進めていった。それ以降については、以下のような説明がある。

「1976年にはすべての今まで英語で教えていた小学校の教育言語がマレーシア語におきかわった。同様に1977年には公立の中等学校のマレーシア語化が始まり、1982年には全ての中等学校の教育用語がマレーシア語となった。これに伴い、大学でもマレーシア語が教育言語となった。現在、小学校から大学までほとんどの学校はマレーシア語で教えられている。」⁷⁾

その言語政策を受けて、学校における英語教育はどのような状況にあるかを説明する。最初にマレーシアの教育制度については、小学校6年、中学校3年と日本と同様で、入学年齢が都市部（6歳半）と農村部（7歳）で異なることが特徴としてあげられる。その後、中等学校（日本における高等学校）では、そのまま2年間学ぶコースと大学予備コースと呼ばれる2年制のコースがあり、後者の生徒はその後大学を3年から4年で終了し、卒業する。義務教育制度については、法的な制度としてはないが、小学校の就学率はほぼ100%とある。この内容に関しては本名の『アジアの最新英語事情』が参考となる。

「英語は小学校から高校まで必修科目として教えられている。小学校の英語教育の目的は、学校内外で話すことと書くことでもコミュニケーションをはかることが出来る英語の基礎的な力をつけること」となっている。1年目は話すことに、それ以降は読み書きに重点をおいてカリキュラムが組まれている。小学校1年生の教科書では、“Let’s talk about it.”や“Let’s say together.”、“Let’s listen and repeat.”といったアクティビティーが用意されていて、あいさつや自己紹介から始まって、身の回りのことが英語で話せるように工夫されている。4年生の教科書のはじめには、「さまざまな背景からくる子ども達（小学生）のニーズに合わせて…英語の4技能を伸ばし、…英語でコミュニケーションが図れるようにする」中略「中学と高校では、英語でコミュニケーションが図れるようにするための4技能を伸ばすシラバスが用意されている。小学校ではほとんど利用されていないコンピュータやAV機器を使って幅広い知識をつけ、それを英語で聞いたり話したりできるようなカリキュラムとなっている。このようにさまざまな学習方法を紹介し、生徒の想像力を養うことを目的にしている。」⁸⁾

その実情を確認するために、UiTMのファイザ教授の案内でプキ・リマ初等学校（SEKOLAH KEBANGSAAN BUKIT RIMAU）を訪問し、宗教、算数、図書館での読書指導の授業参観を

した。算数の授業では、校長先生が何か質問をしてほしいと言われたので、“Have you been to Japan?”と尋ねると、“Yes, I have been to Osaka and Tokyo.”と、インド系の生徒がはっきりとした英語で答えた。クラスのどこからか、“His family is rich.”と、反応があった。続けて、“Where have you been in Osaka?”と、質問すると、“I have been to Universal Studio.”と、返してくれた。“Have you been to Tokyo Disney Land?”と、問いかけた。“Yes, I have.”と、大きな声が返ったので、“I have never been there.”と、切り返した。その時、クラスの半分以上から笑いが生じた。このような生徒とのやり取りから、生徒たちのコミュニケーション力はしっかり身につけていると知見した。ファイザ教授の話では、学校を取り巻く環境は、保護者にホワイトカラーが多く、ほとんどが富裕層であるようだ。学校としても上位にランクされていると聞いた。

また、高等教育機関に関しては、英語で教えてほしいという国民の声を受けて、マレーシア語中心体制から、徐々に変わり始めていることが、同上書に述べられている。

「…1995年8月には文部大臣が各国立大学に英語の使用に関するガイドラインを発表した。このガイドラインでは、各大学にどのクラスを英語で教えるかを定める権利が与えられた。また、外国人教員が教えたり、外国人留学生がいる場合は、授業を100%英語で教えてもよいことになった。最近増えてきた私立大学は教育言語を全て英語にしているところが多い。その理由は、国立大学で授業をマレーシア語で受けても国際的な仕事に従事することが難しいこと、プミプトラ政策以降、中国系やインド系など非マレー系の国立大学進学が極端に制限されていること、英語で高等教育を受けるためにオーストラリアやイギリスなどに私費留学するマレーシア人を国内で教育し、なんとしても2020年までに先進国入りを果たすための優秀な人材を確保するためと思われる。」⁹⁾

これらの内容について、UiTMのマレーシア学生数名に聞いた。これらの状況は同国の学生たちに十分に理解され、その政府が考える「優秀な人材確保」に対しても、彼らは常識として理解していた。

Ⅲ 英語研修内容

1 授業・指導プログラム

英語研修(Communicative English)はすべて、UiTMの国際教育センター(メインキャンパスから車で10分ほど離れた場所にある)の施設で実施された。この施設も大きな敷地を持ち、小さな大学のキャンパス風であった。教室には空調があり、IT機器も使用でき、大きなスクリーンも完備されていた。

授業の指導は、国際教育センターの7名の常勤講師が(表-2)のModuleに沿って、コース別に担当した。それぞれの講師には経験の差はあったが、非常に熱心に指導していただいた。特に9時から12時までの3時間授業であったので、学生の忍耐力を心配した。しかし、外国

に来ている意識、日本語が通じない緊張感からか、全学生が集中して授業を受けた。ほとんどの授業で休憩を取ることはなかった。

3時間連続の授業が成立する要因としては、教員の指導力、バリエーションのある活動、学習支援の学生（「日本語クラブ」¹⁰⁾の学生が多かった）の個人的なサポート等が中心になっていると知見した。その中でも、学習支援学生の存在が大きかった。ある授業では11人の学生に対して12名の学生が参加するクラスがあった。この学習支援の学生は、すべてが教職課程の4年生で、奨学金を授与されている学生であった。日本語ができる学生もいたので、理解不足の学生には効果があると知見した。この指導結果、効果に関してはIV-3の学習支援者によるアンケート結果でも言及する。

指導のプログラムは3つの学習単位資料（Module Information）（表-2）にまとめられていた。Listening and Speaking, Reading, Writingである。特徴としては、すべてのModule Informationに、コースにおける成果（Course Outcomes）、測りうる成果（Measurable Outcomes）、期待する成果（Expected Outcome）と、結果・成果を重視している傾向が読み取れた。参考にそのListening and Speakingの学習単位資料の一部を記載する。

表-2 Module（学習単位に関する資料）

Module Information	
Module:	LISTENING AND SPEAKING
Duration:	12 hours
Instructors:	NOR . . . ELIA . . .
	Email: . . . @yahoo.com
Course Description	
The course will provide various opportunities for students to practice listening and speaking in English. Students will be involved in hands-on activities that will enable them to become familiar with the different contexts of English usage.	
Course Outcomes	
By the end of this course, students should be able to: 1) Listen, understand and respond to various situations according to the themes given by the teacher.	
Learning Activities and Measurable Outcomes	
The course will be organized into 3 units of learning.	

Learning Unit	Activity	Expected Outcome
<p>1. Food Planet (3 hours)</p> <p>Form and Function: To describe taste (adjectives)</p>	<ul style="list-style-type: none"> - T brings in Malaysian food (e.g. nasi lemak, currypuff etc.) and sets up a food station for each food. - Students go around tasting the food. - T explains on form and function (to describe taste). - Students carry out guided practice. - Free Practice 1: Students are divided into groups; each group has to come up with descriptions of their traditional food. 	<p>All outcomes are to be assessed in oral and written formats.</p> <p>a) Identify the adjectives used to describe tastes of local delicacies.</p> <p>b) Use adjectives learnt to describe participants' traditional delicacies.</p> <p>Materials needed:</p> <ul style="list-style-type: none"> - Mahjong paper, marker pens, colour pencils, magic colours, blue tags.

11)

2 教材・課題・指導

各授業では、ペアワーク、グループワークを中心にいろいろな活動を取り入れていた。インターネットの普及により、情報化が進み日本でも使用されている教材も数多く見られた。

Listening & Speaking、Reading、Writing の授業に共通するテーマが、マレーシア文化を特徴付ける料理・ファッションとなっていた。例えば、Listening & Speaking の授業では、ラマダン中（到着した3日目からイスラム教の断食月が始まった）にもかかわらず、実際に各種料理、数多くの果物・お菓子が教室内に運ばれた。本学生たちはそれらを味わいながらその味を表現する形容詞を学んだ。そこでは、持参したものだけでなく、教員が実際にご飯をその場で料理した。この Listening & Speaking の授業の到達目標（Expected Outcome という表現を使っていた）は、「食べ物の味を表現する形容詞を明確にする」であった。そして、他の授業においても、いろいろな場面で実物を教材として使用していた。

また、Reading の授業では、マレーの民族衣装であるバジュクロ (baju kurung) の型紙を、英語の指示文を読み取りながら作成するグループワークの課題があった。それがどのような衣装であるかわかるまでに随所に、想像力・類推力を要求する内容であった。この課題の導入として、What is it? と、一人の学生が提示するものを他の学生が回答していくゲームが取り入れられた。しかし、本学生の多くは、この英文の意味を想像して、それを正確に読み取る作業に難しさを感じていた。同時に、忍耐強くその英文の意味を追求していく姿勢の弱さを知見した。

Writing では、マレーシア料理のレシピを作成する課題であった。一般動詞を復習し、順番を表す副詞などを確認し簡単なレシピを作っていた。この作業にも学習支援学生の存在があった。次に、その要領で日本の伝統的な食べ物の簡単なレシピを作成する課題が提示された。本学生たちもいろいろ考えながら、「いなり寿司」・「卵焼き」・「おにぎり」・「うな重」などのレシピができあがっていった。マレーシアで食べられているものやイラストなども交えたレシピ

もあり、現地の先生・学生に上記の食べ物を理解してもらうことができた。最後の課題は、手紙を書かせるものであった。マレーシアの友達に今日の指導された内容を知らせるものであった。英文の手紙を書き慣れていない本学生たちには、これもまた学習支援学生のサポートを必要とした。日本語の介在も交えて、個人指導を受けながら手紙を書き終え、それらの手紙を全員の前で読み聞かせた。Writingにおいては、授業内における個人指導の必要性を認識した。

全体を通して、各教材、課題をバランスよく3時間の中に配置していた。また、授業のテーマが料理とファッションに絞られている点は、学生の興味を捕らえている点だけでなく、既知の語彙を使用する点でも有効であったと知見した。しかし、数名の本学生の受け取り方には、授業内容の重複が多いというアンケート結果もあった。

3 参観内容

最初の Listening & Speaking 授業の概要に言及する。まずは教員の自己紹介と学生への質問で授業が始まった。緊張感からか“**What did you eat for breakfast?**”というような質問に学生はなかなか答えられなかった。次に各学生が自己紹介し、続いて友人を紹介する活動が、アイスブレイキングの要素も含めておこなわれた。この後、Module（表-2）にあるように、形容詞に関する学習が始まった。まずは学生が知っている形容詞を忍耐強く各学生から拾い上げ、それを簡単な文章にしていく活動が続いた。パワーポイント、ホワイトボードを導入や確認作業では使用した。その後は、このセンターの諸施設を歩き回りながら、それらを表す形容詞を探し、書き留めてくるという活動になった。教員が引率、説明しているので、これは一石二鳥の効果的なキャンパスツアーでもあった。教室に戻ってから、休憩を取りたいか学生に尋ねていたが、希望が出ず続行となった。その後も個人的な質問が各学生にくり返しなされた。最後はワークシートを利用しての確認作業となった。この3時間の授業は、一切の日本語は介在しないで、学生、教員が共に楽しい雰囲気の中終了した。

この授業をはじめとし、計10回、30時間に及ぶ授業の参観をした。そこで知見した内容を、効果的であり、参考になったという視点で以下にその指導の概略、要点をまとめて報告する。

- ・Ⅲ 1の内容に重なる。各授業では到達すべき目標設定（Expected Outcome）がそれぞれに明確であった。
- ・学生が11名であったこともあるが、学生中心の授業展開がなされていた。各学生から忍耐強く回答を引き出す場面を数多く知見した。また、類推、想像する力を辛抱強く要求していた。
- ・3時間の連続授業の中でペアワーク、グループワーク、ゲームなどがバランスよく組み込まれていた。
- ・授業の話題を食べ物、ファッションなどにした点など、学生の関心事をよく捕らえていた。
- ・個人的な対応が適切に行われていた。基礎学力のある学生が授業の中でリーダーシップを発揮できる環境を作っていた。以上は、すべてが各Moduleに共通する内容であった。あえて

Reading について加えるならば、文章内容を把握するための「類推する力を鍛える」ことに重点を置いていた。また Writing については、「説明させる」というドリルを忍耐強く指導していた。

授業を受けた本学生について言及する。本学生は全授業を皆勤し、まじめに受け、少しずつではあるが、日々積極性も出てきていた。全体を通して強く感じたことは、学生の「声が小さい」ということであった。教員からも何度も指摘を受けるが、日本語で話す音量の1/3もない学生が数多く見られた。また、「指導教員アンケート結果」で、発音の指導をする必要性を指摘された。このことは、本学生の声が小さく、明確でない発話を発音の問題として捉えられているとも感じた。実際に、本学生の声が小さいために聞き取れないことで、教員とのコミュニケーションがうまくとれていない場面を数多く知見した。指導の優先順位としては、この「声が小さい」という問題を優先的に指導すべきと考える。

IV アンケート調査結果

1 マレーシア短期留学プログラム—本学生アンケート調査結果

「はじめに」の中で、同プログラムの概要と参加学生について言及した。そして、全授業が終了した後に、現地において、参加学生に同プログラムへの参加の意図、英語の授業に対する認識、評価、改善点などをアンケート調査した。前半では、どのような気持ちでこのプログラムに臨んだか、学習姿勢、英語への関心等を聞き取った。後半は同プログラムにおける英語の授業を中心にその効果、満足度を合計13の項目で質問した。

質問の①から質問の④に対する回答に言及する。

①「なぜこのプログラムに参加しようと思いましたか？」との問いには、他のプログラムに参加できなかったから、何となく海外へ行きたかったなど消極的な回答が多く見られた。②「英語は大学の授業以外でどんな勉強をしていますか？」については、本、雑誌、インターネット、3ラウンドシステムなどがあがった。そして、③「インターネットを利用していますか？」に対しては11名中の6名が利用していた。そのうち、FACEBOOKの利用者が3名いた。④「英語について教えてください」では、得意な方だと答えたのは1名で、特に会話が苦手という回答が4名で一番多かった。

質問の⑤から質問の⑩については回答を(表-3)にまとめ、その結果について言及する。

表-3 「英語研修・他のプログラムに対する調査結果」

* 左の欄には授業を5段階で評価した。右はその人数を表す。

Communicative English の授業 他のプログラム	← bad good →		← bad 人数 good →				
授業名・プログラム名	評	価	1	2	3	4	5

⑤ Listening & Speaking	1	2	3	4	5			1	4	6
⑥ Reading	1	2	3	4	5		1	1	7	2
⑦ Writing	1	2	3	4	5		1	2	6	2
⑧ 午後のアクティビティ (Faculty Programme)	1	2	3	4	5	1	1	5	3	1
⑨ 研修小旅行 (Cultural Visit or Academic Fieldtrip)	1	2	3	4	5				7	4
⑩ ホームステイ体験	1	2	3	4	5	1	2	4	3	1

⑤から⑦の授業への質問については、参観での知見も含めて、全体的に満足度に高い傾向がある。特に Listening & Speaking に関しては楽しんで受講していた。午後のアクティビティに関しては楽しんでいたように知見したが、評価は分かれたので、それぞれの内容について質問する必要性を感じた。⑨の小旅行については、ショッピングの時間がなかったという不満を多く聞いたが、それは満足度とは結びついていなかった。⑩の評価が分かれたのは、各滞在家庭の対応に差があったことによると考える。

最後に、質問⑪、⑫、⑬の「授業に関するよかった点」、「日本におけるものとの違い」、「改善への提案」に対する質問の自由記述の回答についてその抜粋を記述した。そして、この内容については聞き取り調査内容も加えて言及する。

⑪「英語の授業で特によかった点」については：英語をたくさん聞いたので耳をならす練習になった・先生が優しくゲームなどもあり楽しかった（複数）・先生の発音が聞き取りやすかった・基礎から教えてもらったので再確認できた（複数）・リーディングは役に立った・いろいろな教材で勉強できた・マレーシアの文化が学べた・マレーシアの料理をたくさん食べられてうれしかった。

（以下のものも含めて、下線は筆者の加筆）

⑫「日本での授業と違って感じ点」では：教え方が優しい・参加型の授業でした（複数）・教室から外に出る勉強が楽しかった・発音が英米人による発音と少し違うところもあった（複数）・英語による授業・先生に質問され、その答えをよく求められた・実物を使うから3時間授業なのに休みなしでもがんばれた・先生が一人一人を指名して授業をしていた。

⑬「授業内容を改善するための考え」では：授業における内容の重なりをなくし、先生方の情報共有をしてほしい（複数）・やっている内容がやさしい・先生が興味を引かせるのが上手であった・授業というよりも遊びが多かったので英語は身に付いた感じがしなかった。

全体としては、授業に対する満足度を裏付ける内容が多かった。しかし、授業の重なり、発音の問題、「遊び」と理解されてしまった内容等の指摘もあった。特に、内容が易しいという指摘については、基礎学力の差（TOEICの得点で300点近い差がある）を考慮して、同プログラムの修正をする必要性を感じた。この学力差に関しては、授業の参観を通して知見した。

2 マレーシア短期留学プログラム—指導教員アンケート調査結果

ここでは、二つのパート、AとBに分けて調査した。パートAは教員が学生の授業をどうとらえ、どんな態度で本学生が受講していたかを中心に調査した。しかし、一部の教員からはこれらの内容はむしろ学生自身に聞くべき内容であるとの指摘を受けた。パートBは、マレーシアの学生との比較と、指導して感じた日本人学生の弱点と思われる部分について、その効果的な指導の提案も含めて、自由記述で回答していただいた。それらを原文のまま抜粋して取り上げた。

パートAの質問①から⑬はプログラムへの理解、授業、学生の学び、その姿勢・態度、指導による成長度合い等を調査した。英文のまま、その項目と7名の教員の回答結果を(表-4)で報告する。

表-4 「指導教員アンケート調査結果」

Student Evaluation Form

This questionnaire is to assess the students recently involved in the Communicative English programme. Please take a few minutes to answer the questions below.

PART A Select the rating that best describes your experience with the participants

	Strongly Agree	Agree	Neutral	Disagree	Strongly Disagree
① The participants like and enjoy the training.		7			
② The participants consider the programme relevant.		6	1		
③ The participants like the venue, the classes and the timing of the programme.		6	1		
④ The participants display the effort required to make the most of the learning.	1	6			
⑤ The participants perceived practicability and potential for applying the learning.	1	6			
⑥ The participants learnt what was intended to be taught.	1	6			
⑦ The participants experience what was intended for them to experience.	3	4			
⑧ The participants experienced the extent of advancement or change after the programme.	1	3	3		
⑨ The participants have used the relevant skills and knowledge.	2	4	1		
⑩ The participants have displayed noticeable and measurable change in the activity and performance.	2	5			

⑪ The change displayed by participants in behaviour and new level of knowledge sustained.	2	4	1		
⑫ The participants would be able to transfer their learning to another person.	3	2	2		
⑬ The participants are aware of their change in behaviour, knowledge and skill level.	2	2	3		

12)

本学生への調査項目質問⑤から⑦の授業への質問では、全体的に満足度に高い傾向があった。これは授業を楽しんでいたという学生側の回答を裏付ける内容が読み取れた。ここでの学びを発展、応用できるかとの問いに関しては、3週間のプログラムを3つのModuleに分けて、それを数人の教員が指導するという体制であるために指導が短時間であったことや学生の基礎力の差の把握が不十分となったと読み取れた。学生は日本に戻ると、英語でコミュニケーションをとる機会、環境はほとんどない。そのような状況を考えるとこの学習をさらに発展させる難しさを認識した。

パートBにおける質問1は、What do you think are the weakness (es) of the participants in English language compared to Malaysian students? 「マレーシアの学生と比較して、本学生の弱点をどう思うか?」である。そして質問2は How can the weakness (es) be improved? 「その弱い領域をどう指導するか?」である。それに対する回答を原文のまま記載して、それらについて言及する。

質問1に対する回答； They can understand the instructions well, but they find it difficult to come up with appropriate vocabulary to suit the context, and pronunciation too is a problem. Ability to respond verbally or to be involved comfortably in communication. Some of the students are quite shy, which will hinder them to improve their speaking abilities. Since they are foreign language learners of English, perhaps their exposure to the language is limited, there they still lack the vocabulary to speak English proficiently and naturally. Spoken language and pronunciation. Lack of knowledge in English language. They are passive. They don't understand some vocabulary. If we speak fast, they don't understand. The participants are less participative. They are quite reluctant to answer when questions are given to them in the teaching and learning process. However, they enjoy doing a lot of hands on activities compared to activities that require them to speak.

全体を通して、本学生の特徴を捉えている内容が多い。状況にあった語彙が見つけれられない、発音がはっきりしない、恥ずかしがり屋だ、話すことに積極的になれない、そしてやはりマレーシアでは英語を使用する機会がたくさんあるが、日本では外国語なので話す機会が少ない点を上げている。それぞれが今後本学生を指導する上で、参考になる指摘であった。

質問2に対する回答：Lots of pronunciation activities can be done in class. Expose them to difficult vocabulary suited to the context used in the teaching. They need to be able to use more vocabulary or words. Need to be able to take more risks. The students must learn the more risk-taking skills, and learning requires risk-taking. Reading more English materials, interacting with English speakers or speakers of English, exposure to English language like students exchange programme to English-speaking countries. A lot of exposure to English through intercultural classes. Must be willing to try. Encourage a lot of reading in English classes. So it can be achieved. More communicative English games. Mix the students in the normal classroom. It can be improved by motivating them to speak up more in class. Activities given to them should be handy on and requires them to give explanation.

それぞれの指摘は、本学生、日本の大学生に、共通する必須の指導内容が多いと感じた。語彙力を増強する、発音指導に力を入れる、授業の中で英語を話させる、多読を奨励する、そして、失敗を恐れないということが強調されていた。参観授業の中でも重点を置いて指導されていた内容も多く、これも今後における本学生の指導上の参考になった。

3 マレーシア短期留学プログラムー

ー学習支援マレーシア学生アンケート調査結果

Ⅲの2において、学習支援のマレーシア学生について言及した。生活面全体を考えると、マレーシアの学生、特に「日本語クラブ」の学生による支援が大きな影響力を持った。それらの学生は歌、アニメ、漫画に関心があり、本学の学生との情報を共有していた。むしろ、現地学生の方が、最新の詳しい情報を手に入れていることも知見した。よって、両学生が打ち解けるには時間はかからなかった。聞き取りをしている中、一番多かった回答は「現地学生の日本語力に頼ってしまい、英語でのコミュニケーションをとる機会を減らしてしまった。」であった。現実にマレーシア学生との会話を聞いていると日本語の介在が多いことが気になった。安易に日本語を介在させることには反対ではあるが、語学力の急激な進展は難しいので、日本語を介在しつつも、その交流から得たものを今後の英語学習の動機付けにしてもらいたい。

学習支援マレーシア学生からのアンケート調査結果を報告する。

アンケートには10名のマレーシア学生が回答した。質問の①「海外の学生に学習支援をするのははじめてか？」では、1名を除いて全員が初めての体験であった。②「教えるにあたって難しいことがあったか？」については、英語力が限られているのでコミュニケーションが難しいと半数の5名が答えた。③「マレーシアの学生と比較しての英語力をどう思うか？」では、7名が本学生の英語力が低いと答え、残りの回答は言語環境の違いを指摘した。④「本学生を指導することで問題はあったか？」については、半数の5名はないと答えた。残りの回答では、語彙力がない・発言や説明するのになれていない・英語での理解が十分でなかった・質問することを怖がっていた等があった。

質問⑤では、聞く、話す、書く、読むについての4つの技能を5段階で評価してもらった。

以下その結果であるが、教員の評価と同様に話すことが弱いとの評価がでた。

表-5 「学習支援学生アンケート調査結果」

Skills	← Bad Good →					← Bad Good →				
	評 価					1	2	3	4	5
Listening	1	2	3	4	5		1	3	5	1
Speaking	1	2	3	4	5		5	3	2	
Writing	1	2	3	4	5		2	4	3	1
Reading	1	2	3	4	5		1	5	3	1

* 左の欄には学生の各スキルの5段階評価の数字。右はその人数を表す。

最後の質問⑥では、このプログラムを改善するための提案を自由記述してもらった。英語をしゃべる機会を増やす・外国人の友人を持ち英語でのコミュニケーションを増やす・海外に出かける・よりプログラムを計画的に行う・英語による活動を改善していく・指導教員に日本文化への理解を深めてもらう（複数）・学習支援学生の数を各授業で一定にする・教員に本学生について英語のレベルを詳しく知ってもらう・さらに活動的な授業をするよう経験豊かな教員が担当する等の回答を得た。

4 聞き取り調査結果

同プログラムの最終日に、次の3つの点について聞き取り調査をした。a - プログラムを終えて感じたこと、b - 英語の研修について、c - 自分自身の英語力の向上に関して、各学生に一人一人尋ねた。

a に関しては、「よい人間関係、よい交流ができた」という答えが多数を占めた。これは、マレーシア学生との人間関係が中心ではあるが、本学生同士の関係にも及んでいた。その後には、「楽しんだ、よかった」という言葉が続いた。そこには、マレーシアの学生に対して、「優しかった、親切だった」という評価も加わっていた。

b では、授業の楽しさと、真摯に指導してもらった指導者への高い評価があった。そして、現地学生の日本語に頼ってしまったことを、マイナス面で捉える学生と、日本語を使ってくれたので助かったというプラス面の評価があった。

c では、「強制的に英語をしゃべらせられるのがよかった」と前向きな答えがあった。また、リスニング力がついたという答えが複数あった。その中にはその力がついたので、「逆にスピーキング力のなさを再認識した」と答えた学生もいた。基礎学力のある学生は、「英語でのコミュニケーションの楽しさを再認識した」と話した。ほぼ全員が英語力不足を実感し、それは、今後の英語学習の動機づけへと繋げていた。これは同研修の成果としてに期待していた

ものでもある。

この聞きとり調査を通して、各学生から可視化しにくい、人間的な成長を感じられたのが引率者としての収穫でもあった。

V むすび

マレーシアにおける「英語」については、歴史、環境、教育等の面で日本との違いについて認識を深めることができた。そして英語研修の内容を振り返り、各アンケート結果から、参加した本学生の英語を使って「話す・説明する」力が弱いことを認識した。それに対する指導について、参考となる資料を得ることができた。それらによって、このプログラムの成果があったことを評価する。そして、その成果は、本学生が「英語の学び」だけでなく、「多くの学び」をすることができたことと考える。それらは、「自信」、「異なるものに対する寛大さ」、そして「理解する態度」に現れていると考える。

本名は、『世界の英語を歩く』の中で、イギリスの言語意識教育を例にし、民族的・文化的に多様化が進行するなかで、言語意識教育のカリキュラムの一部を紹介している。そこでは、言葉や文化の違いは恐怖心を引き起こし、相手を拒否する偏狭な態度を生むことがあると心配していた。そこで、学校教育の中で、言葉の仕組みや働き、そして言葉の普遍性と多様性を知ることによって、民族と文化の大切さを学んでもらうという。その指導者のホーキンス教授のことがあがる。The exchange of different language experiences can promote confidence, tolerance, and understanding. (言語の違いを経験することによって、「信頼感」、「違いに対する寛大さ」、そして「理解する態度」を育成できるでしょう)¹³⁾

本学生に関しては、英語に対する、特に相手の話すことを聞いて理解できる自信が得られたと知見した。寛大さについては、異文化の理解に加えて学生同士の間関係における寛大さをも学んでいた。そして、理解する態度については文化と共に言語の重要性への理解があった。各参加学生が収穫したこの3つの収穫物を充実、育成してくれることを望む。

私は、語学(英語)の学びを中心にその効果、影響を考えてきた。しかし、現実には本学生にとって、マレーシアの学生との交流、ここで体験した「言語の違いの経験」がより大きな影響を与えていた。他の短期留学プログラムとの比較は難しいが、あるプログラムでは学生が夏の休みのために不在であるため、その交流がうまくいかず、日本人が孤立した集団を作ってしまった例を散見している。

ひとつの大学における、少人数の体験からの考察である。「なぜ、マレーシアで英語を研修するの?」の答えの一端は、他民族間で英語が共通言語として大事な役割をしている環境、マレーシア学生の優しさ、そして彼らの日本に対する関心の高さを備えた環境があるためと考えた。

参加学生にとって、アジアにおける同世代の若者との交流を深めた意義は大きい。この交流

を全員が大切にし、継続してほしい。そしてその体験から学んだもので、各自の日常生活を見直し、自らの価値観を再考し、それを幅の広いものにすることを期待する。

注

- 1) 『朝日新聞』2010. 8. 1. 朝刊
- 2) 祖慶壽子 (2005)『アジアの視点で英語を考える』 p.73 朝日出版社
- 3) 外務省：マレーシア 基礎データ
www.mofa.go.jp/mofaj/area/malaysia/index.html (2010年9月検索)
- 4) 本名信行 (2006)『世界の英語を歩く』 p.49 集英社新書
- 5) www.uitm.edu.my (2010年9月検索)
- 6) 本名信行 (2002)『アジアの最新英語事情』 p.261 大修館書店
- 7) 同上書 p.262
- 8) 同上書 p.264
- 9) 同上書 p.266
- 10) UiTM の日本語を学ぶ学生たちのサークル名称
- 11) 資料の中の個人情報等は削除してある
- 12) donald kirkpatrick's learning evaluation theory-a training and learning, measurement. Evaluations and assessments model 参考
- 13) 本名『世界の英語を歩く』 p.171

(2010.9.24 受稿, 2010.10.26 受理)